

県営かんがい排水事業
関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ-2

— 守山市杉江遺跡 —

— 近江八幡市金剛寺遺跡 —

1987・3

滋賀県教育委員会

財団 滋賀県文化財保護協会

県営かんがい排水事業
関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ-2

— 守山市杉江遺跡 —

— 近江八幡市金剛寺遺跡 —

1987・3

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

序

県下のは場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査はすでに14年目を迎え、は場整備事業の拡大に伴う発掘調査件数の増加によって種々の資料や成果が蓄積されております。

発掘調査で得られた成果を公開し、広く埋蔵文化財に関する理解を深めていただく一助にしたいと、ここに昭和61年度に実施いたしました県営かんがい排水事業に伴う発掘調査の報告書を2分冊に分けて刊行するものであります。

最後に発掘調査にあたり、御協力いただきました地元関係者並びに関係諸機関に対し、厚く感謝の意を表すと共に報告書の刊行に御協力いただきました方々に対しても厚くお礼申し上げます。

昭和62年3月

滋賀県教育委員会

教育長 飯田 志農夫

例 言

1. 本書は、県営かんがい排水事業に伴う守山市杉江遺跡、近江八幡市金剛寺遺跡発掘調査報告書Ⅳ－1で、昭和61年度に発掘調査したものである。
2. 本調査は、滋賀県農林部からの依頼により、滋賀県教育委員会を調査主体とし、財滋賀県文化財保護協会を調査機関として実施した。
3. 本書で使用した方位は磁針方位に基づき、高さについては、東京湾の平均海面を基準としている。
4. 本事業の事務局は次のとおりである。

滋賀県教育委員会

文化財保護課長	服部 正
課長補佐	田口宇一郎
埋蔵文化財係長	林 博通
主任技師	葛野 泰樹
管理係主任主事	山本 徳樹

財団法人滋賀県文化財保護協会

理事長	南 光雄
事務局長	中島 良一
埋蔵文化財課長	近藤 滋
調査三係長	兼康 保明
調査三係技師	仲川 靖
”	稲垣 正宏
総務課長	山下 弘
総務課主事	泉 喜子

5. 本書の執筆・編集は、第一章杉江遺跡については、稲垣正宏が、第二章金剛寺遺跡については、仲川 靖が行なった。
6. 出土遺物や、写真、図面については滋賀県教育委員会が保管している。

目 次

第一章 杉江遺跡

1. はじめに	1
2. 位置と環境	2
3. 調査の経過と結果	5
4. おわりに	7

第二章 金剛寺遺跡

1. はじめに	9
2. 位置と環境	9
3. 調査経過	10
4. 調査結果	10
5. 小 結	15
6. おわりに	16

挿 図 目 次

第一章 杉江遺跡

- 第1図 周辺遺跡分布図
- 第2図 遺跡位置図
- 第3図 土層断面図
- 第4図 遺構全体図 (第2トレンチ)
- 第5図 出土遺物実測図
- 第6図 遺構全体図 (第3・4・5トレンチ)

第二章 金剛寺遺跡

- トレンチ配置図

図 版 目 次

第一章 杉江遺跡

- 図版一 杉江遺跡 第1トレンチ北部(南より)
第1トレンチ北部(北より)
- 図版二 杉江遺跡 SP001・SP002(SB001掘削前-南より)
SP001・SP002(SB001掘削後-南より)
- 図版三 杉江遺跡 SB002(西より) SB001(東より)
- 図版四 杉江遺跡 SP001(西より) SP002(西より)
- 図版五 杉江遺跡 SB002北側pit群(南より)
SB002(南より)
- 図版六 杉江遺跡 SB002(東より) SB002(東より)
- 図版七 杉江遺跡 第1トレンチ南部(南より)
第2トレンチ南部(南より)
- 図版八 杉江遺跡 第2トレンチ北部(北より)
第2トレンチ中央部(南より)
- 図版九 杉江遺跡出土遺物

第二章 金剛寺遺跡

- 図版一 金剛寺遺跡 トレンチ北側(北より)
トレンチ南側(南より)
- 図版二 金剛寺遺跡 出土遺物
- 図版三 金剛寺遺跡 出土遺物
- 図版四 金剛寺遺跡 遺構実測図
- 図版五 金剛寺遺跡 遺構土層観察図
- 図版六 金剛寺遺跡 遺構土層観察図
- 図版七 金剛寺遺跡 遺物実測図
- 図版八 金剛寺遺跡 遺物実測図

第一章 杉江遺跡

1. はじめに

本報告は、昭和61年度県営一般かんがい排水事業守山南部地区にともなう杉江遺跡の発掘調査成果を収めたものである。

杉江遺跡は、守山市杉江町の集落から南方の耕作地へ広がっている。今回のかんがい排水



- (津浦町) 1 烏丸崎遺跡 2 下物遺跡 3 花橋寺廃寺遺跡 4 縣史跡 観音寺館遺跡 5 縣史跡 観音寺廃寺遺跡 6 上東遺跡 7 安国寺遺跡 8 津田江遺跡 9 皆山遺跡 10 観音堂廃寺遺跡 11 津田江湖底遺跡 12 松皮堂遺跡 13 印岐志呂神社古墳跡 14 長束遺跡 15 長束三坊遺跡 16 中堂遺跡 17 長束館遺跡 18 南隣畑遺跡 19 北太田遺跡 20 片岡遺跡 21 内畑遺跡 22 石子遺跡 23 志那中遺跡 24 大敷石寺遺跡 25 淨空寺廃寺遺跡 26 萬光寺廃寺遺跡 27 穴村遺跡 28 吉田遺跡 29 橋家廃寺遺跡 30 宝光寺遺跡 31 淨庵尼寺遺跡 32 西出遺跡 33 北大堂遺跡 34 宝田遺跡 35 大志寺遺跡 36 新堂前遺跡 37 坊ノ城遺跡 38 西南遺跡 39 下笠城跡 40 下之笠堂遺跡 41 馬場遺跡 42 上之笠堂遺跡 43 正覚寺遺跡 44 宮前遺跡 45 片岡東光寺遺跡 46 十天堂遺跡 47 大黒寺遺跡 48 片岡廃寺遺跡
- (守山市) 49 横江遺跡 50 赤野井橋遺跡 51 小津新遺跡 52 仁願寺遺跡 53 正堂寺遺跡 54 昌壽院遺跡 55 山賀西遺跡 56 弘前遺跡 57 赤野井新遺跡 58 杉江北遺跡 59 小津神社遺跡 60 杉江遺跡 61 杉江東遺跡 62 観音寺遺跡 63 寺中遺跡 64 矢島御所遺跡 65 布施野城遺跡 66 狐塚遺跡 67 赤野井遺跡 68 川中遺跡 69 長塚遺跡 70 藤野山西遺跡 71 石田遺跡 72 森川原遺跡 73 歌賀遺跡 74 歌賀城跡 75 歌賀寺遺跡 76 歌賀南遺跡 77 冬塚遺跡 78 兼師堂遺跡 79 三宅北遺跡 80 三宅城跡 81 大門遺跡 82 金ヶ森西遺跡 83 中島遺跡 84 金森城跡 85 金森遺跡 86 古高遺跡 87 下長遺跡 88 塚元跡遺跡 89 船鹿堂遺跡 90 船鹿堂城跡 91 下之郷遺跡 92 吉身西遺跡 93 正福寺遺跡 94 石田三宅遺跡 95 金森東遺跡 96 三津川遺跡 97 阿弥陀寺遺跡 98 吉身中遺跡 99 雲部庵遺跡 100 東門院遺跡 101 瀬陽堂遺跡 102 沼根寺遺跡 103 本堂寺遺跡 104 女天神古墳 105 藤部城跡 106 伊勢遺跡 107 阿村北遺跡 108 西長塚遺跡 109 山賀遺跡
- (東東町) 110 靈仙寺遺跡 111 北中小路遺跡 112 棒遺跡 113 十里遺跡 114 笠川原敷跡 115 笠川城跡

第1図 周辺遺跡分布図

事業に伴う用水路敷設予定線は遺跡の中心部を通るため事前に発掘調査を実施することとした。

調査は、財団法人滋賀県文化財保護協会埋蔵文化財課調査三係技師稲垣正宏を担当者として、昭和61年10月15日から11月5日まで現地調査をおこない、ひきつづき3月31日まで整理調査を実施した。

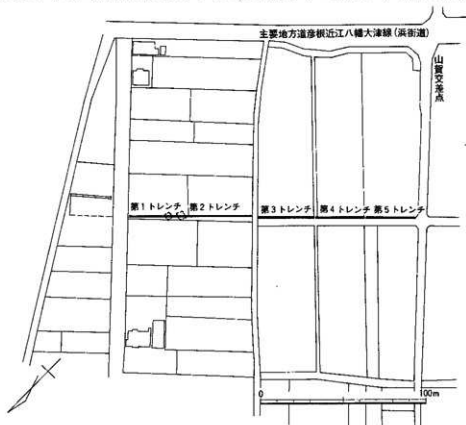
現地調査にあたっては、草津県事務所土地改良課、守山南部土地改良区、地木山賀町の協力を得た。記して謝意を表したい。

2. 位置と環境

守山市域は野洲川上流から流水により運ばれた堆積土により成る沖積平野上にある。

しかし、この沖積平野は漸進的に広がっていったものではなく、形成進度には時代的変遷がみられる。

つまり、古代律令国家形成以前、鈴鹿山系の森林が良好に保存されていた時代には、山林からのゆるやかな流出土によるゆっくりした堆積がおこなわれたが、律令国家成立以降

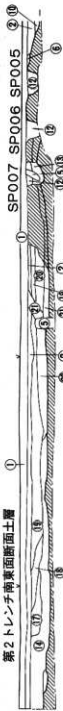


第2図 遺跡位置図

第1トレンチ南東面断面土層



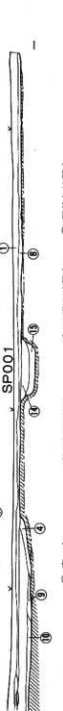
第2トレンチ南東面断面土層



SP004 SP003



SP001



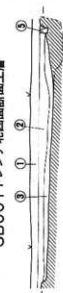
- ① 表土
- ② 茶褐色粘質土
- ③ 暗茶褐色粘質土
- ④ 褐色粘質土
- ⑤ 灰色粘土
- ⑥ 灰色砂質土

- ⑦ 灰褐色粘土
- ⑧ 粘土 (灰色粘土)
- ⑨ 淡褐色粘質土
- ⑩ 褐色粘質土
- ⑪ 粘土 (深灰色粘土)
- ⑫ 褐色粘土

- ⑬ 茶褐色砂質土
- ⑭ 茶色砂質土
- ⑮ 灰褐色粘質土
- ⑯ 灰褐色粘質土
- ⑰ 茶灰色砂質土
- ⑱ 茶褐色砂質土

- ⑲ 灰褐色粘質土
- ⑳ 茶灰色粘質土
- ㉑ 淡茶灰色粘質土
- 地山=灰色シルト (薄混り)
- Le=86.50m

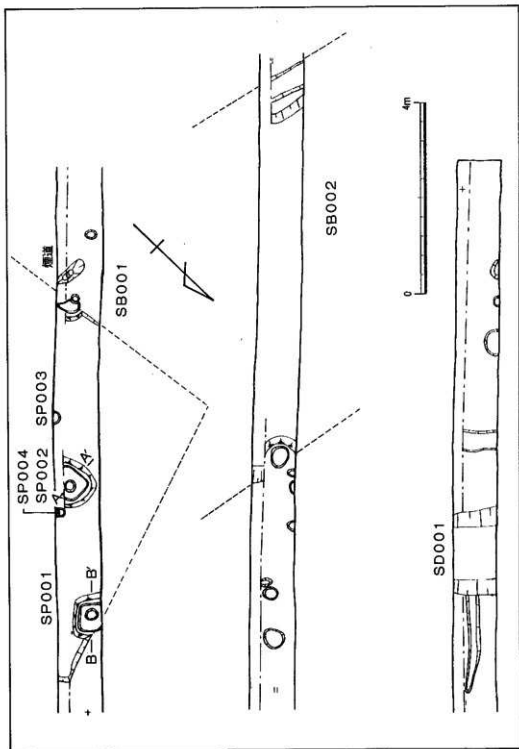
SB001トレンチ北西面断面土層



SB002トレンチ北西面断面土層



第3図 土層断面図



第4図 遺構全体図(第2トレンチ)

は大規模な森林伐採がおこなわれると、山林が荒廃し、(特に鎌倉時代以降荒廃した)大雨の時には土石流が発生し、大量の土砂による急速な堆積がおこなわれ、守山市内に多くの自然堤防が残された。^①

自然堤防を形成した野洲川分流は現野洲川の南側に多く存在するが、中でももっとも南に位置する境川は、野洲川の最大の分流であり、盛時の最大幅は100m以上、明治末期でも32mの幅があったとされる。^②しかし、現在は川幅5m程度の小川である。

当遺跡に近接する山賀川は、境川の支流であり、本調査区中の、第2トレンチにおいて山賀川の小規模な河岸段丘(沖積段丘)が検出されている。

杉江遺跡周辺^③の遺跡を上げると、山賀川の沿岸には杉江東遺跡(古墳時代～中世)、山賀遺跡(弥生時代～中世)、山賀西遺跡(弥生時代～奈良時代)、小津浜遺跡(弥生時代～古墳時代)が所在し、山賀川の河口沖には赤野井湾遺跡(弥生時代～中世)がある。

3. 調査の経過と結果

配水路敷設ラインについては、工事により遺跡破壊がされる幅1.0m、長さ1725mの全配水路ラインについて、発掘調査を実施した。なお、工程の関係から、調査区を5ブロックに分け、各々第1～第5トレンチとした。

遺構は、地山である灰色シルト一面にのみ掘込まれていたが、工事深度GL-100cmまでに下層遺構面が存在する可能性もあり、一部を掘下げて確認したが、下層遺構面はなかった。

(1) 第1トレンチ

第1トレンチは、調査区東北端に所在する長さ20.0mのトレンチである。

地山は、GL-約70cm以下で、標高85.85mを測る。堆積は砂粒の大ききの違う茶褐色土の水平堆積である。第1トレンチには遺構はなかった。

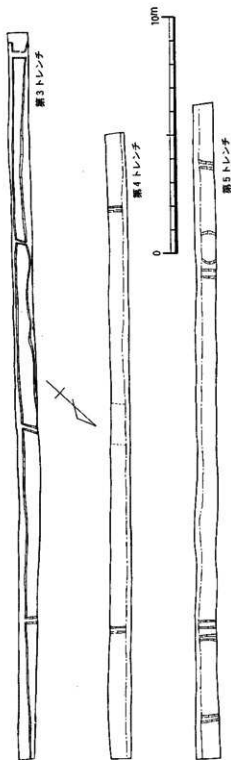
(2) 第2トレンチ

第1トレンチの南西に接続して設定した長さ53.6mのトレンチである。罌穴住居、掘立柱、溝跡など遺構が集中している。



第5図 出土遺物実測図

土層は、トレンチ東北部(東北端から南西へ12m程)は、第1トレンチと同様な水平堆積であるが、第1トレンチに比べて土色がやや灰色である。地山



第6図 遺構全体図(第3・4・5トレンチ)

はGL-65cmから-80cm以下で、標高は、86.10mから86.30mで第1トレンチに比べて、高くなっている。

トレンチ東北端から南西へ12mの地点から一気に地山上面のレベルがアップし、GL-20~-30(耕土床土直下)になる。標高は86.90m程度でトレンチ南西端まで同一レベルである。

遺構では、まず、掘立柱の柱痕7箇所があげられる。SP005~007は、断面がトレンチ壁面に現れたもので、SP003、SP004は一部がトレンチ遺構面で検出され、断面もトレンチ壁面に出現している。

柱痕のうちSP005~007は、地山に直接掘り込まれているが、SP001~004は、竪穴住居SB001の埋土の上面にまで柱痕がおよんでいる。SP001、SP002は、一辺50cmの隅丸方形の掘方、直径24cmの柱穴を有するしっかりしたもので、明らかにSB001の廃棄、埋没後、掘り込まれたものである。

SB001は、西辺屋外にカマドの煙道を有する竪穴住居であるが、トレンチに現われている部分が少ないため、平面プラン等は不明である。北西、南東のトレンチ壁面に断面が現われている。北西断面には、竪穴住居の壁溝がみられる。

SB002は、SB001の南西に隣接して所在する竪穴住居である。SB001と同様平面プランは不明である。北西、南東のトレンチ壁面に、SB001と同様の壁溝がみられる。

竪穴住居は、中軸ラインが、東西南北の正方位からあまりはずれることがないと思われるが、上述の

ようにトレンチに現われている部分が少なく、住居跡の4隅のように、中軸方向の割り出せる部分がトレンチ内に現われていないため確実なことは言えない。

SD001は、トレンチ南西端にある溝跡である。堆積土は2層で水平堆積している。

SD001からは、少量の土器の出土がみられる。第5図-1（以下5-1と略）は須恵器杯蓋である。口径は11.0cm、内外面とも回転ナデ調整され、色調は青味灰色、胎土は精良で焼成は良好で硬質である。5-2は須恵器杯身で、口径10.4cm、内外面とも回転ナデ調整され、色調は青味灰色、胎土は0.5～1.0mmの砂粒を少し含み、焼成は良好で硬質である。5-3は須恵器短頸壺で、肩部外面に沈線を有し、内外面とも回転ナデ調整され、色調は内面淡灰色、外面灰色で、胎土は0.5～2.5mmの砂粒を含み、焼成は良好で硬質である。これらの須恵器は8世紀代のものである。SD001からはこれらの他に18世紀代の波佐見系染付磁器壺も出土している。

(3) 第3、4、5トレンチ

第3、4、5トレンチは、床土直下に地土上面（遺構面）がみられる。遺構面のレベルはGL-20～40cmである。出土遺物が少ないため年代ははっきりしないが、耕作痕（ウネの跡）とシケヌキの跡が検出された。

4. おわりに

今回の調査は、調査面積が狭く、細長い調査トレンチを設定したため、遺跡の全容を把握することはできなかったが、調査によって判明した主な成果を述べてみたい。

第1に山賀川の旧河道跡とそれに伴う小規模な河岸段丘を検出したことがあげられる。

第1トレンチ及び第2トレンチの北東端から南西へ12mのラインまでが旧河道敷であり第1トレンチ東北端に隣接して存在する現山賀川は、右岸にはトレンチを入れていないので不明であるが、左岸においては幅12m程度の河川敷が検出されたことから、山賀川も現状は河幅2m程の小川であるが、住時は30m以上の河幅をもっていたと思われる。

また、小規模な河岸段丘上には、奈良時代の遺構が検出されているが、そのうち竪穴住居跡は、住居跡外に焼道が突き出しており、煙道のタチアガリは急なのが特徴である。

これらの特徴からこの竪穴住居の年代は奈良時代後半^④（8世紀末）と考えられる。SD001からは奈良時代の須恵器が出土しており右岸の段丘上ではSB001、SB002、SD001、掘立柱建物群などの集中する第2トレンチが遺跡の中心であり、遺跡の成立

は奈良時代と考えられる。

遺跡の成立以降、堅穴住居の埋没後、その埋土を掘込んで掘立柱建物が建てられていることから、遺跡は、各時代にわたって存在していたことが分かる。

また、調査区南西部にあたる、第3、4、5トレンチからは、近世とおもわれる耕作痕と暗渠排水管しか検出されていないことから杉江遺跡の住居跡群は、第2トレンチより南西には拡がらないことが判明した。

註

- ① 井関弘太郎 『沖積平野』 (東京大学出版会 昭和58年)
- ② 『守山市史』上巻 (守山市史編纂委員会 昭和49年)
- ③ 『昭和60年度滋賀県遺跡地図』 (滋賀県教育委員会 昭和61年)
- ④ 田中勝弘、吉田秀則 『国道365号線バイパス工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－伊香郡高月町井口・柏原遺跡－』 (滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 昭和59年)



第1トレンチ北部(南より)



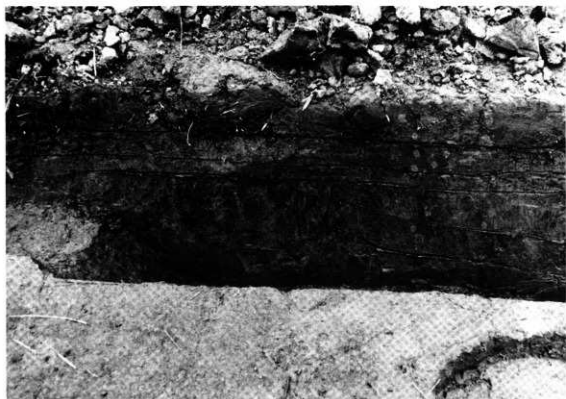
第1トレンチ北部(北より)



SP001・SP002 (SB001掘削前-南より)



SP001・SP002 (SB001掘削後-南より)



SB002 (西より)



SB001 (東より)



SP001 (西より)



SP002 (西より)



SB002北側pit群(南より)



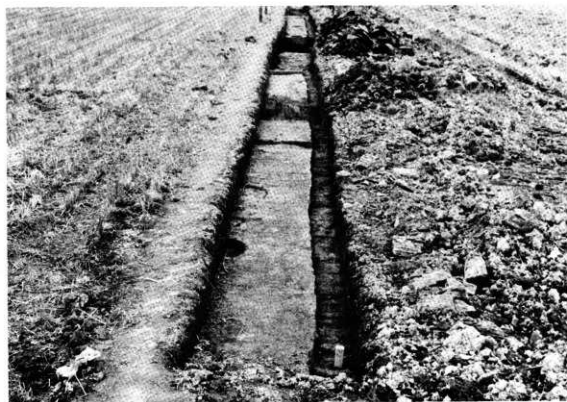
SB002(南より)



SB002 (東より)



SB002 (東より)



第1トレンチ南部(南より)



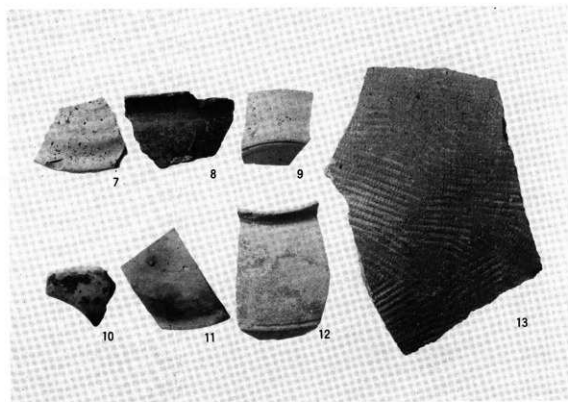
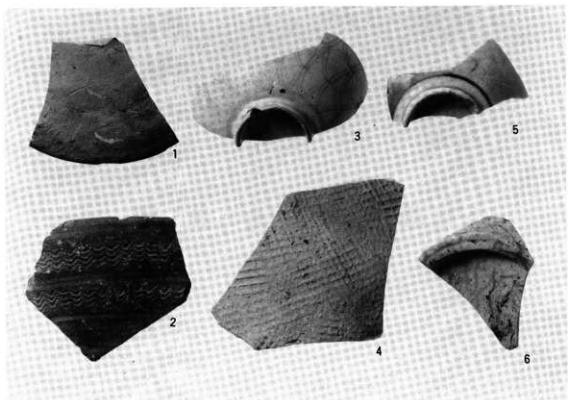
第2トレンチ南部(南より)



第2トレンチ北部（北より）



第2トレンチ中央部（南より）



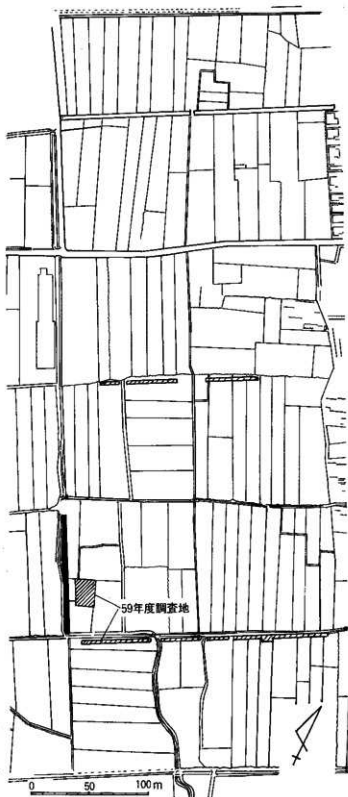
第二章 金剛寺遺跡

1. はじめに

当遺跡は、奈良時代・平安時代・鎌倉時代を中心とした集落跡であり、さかのぼって弥生時代までの遺物を出土している。当該地は、これまで、農道として調査対象地からはずれていたが、この度、県管かんがい排水事業の一環として、昭和59年度に実施した事業の南側に延長する本管埋設に先立ち、滋賀県の要請を受けて、急拠発掘調査を実施したものである。

2. 位置と環境

金剛寺遺跡は、近江八幡市金剛寺町地先に所在する。今回の調査地点は、小字十四ノ坪・十五ノ坪の境界になる農道下である。標高92～93mの平地に立地する。周辺は宅地化が進み、ほ場整備事業が実施され、あわせて、県道拡幅工事等が行われ従来の環境が激変している。十四ノ坪・十五ノ坪は、旧来の条里地割りの名残を残すものと考えられるが、どこまでさかのぼれるかは不明である。



トレンチ配置図

当遺跡は、これまで5回わたる発掘調査が実施されている。昭和58年度には、奥宮かんがい排水事業に伴い、今回調査地点の北西部付近で実施され、9世紀末～10世紀後半の掘立柱建物群が検出された^①。これら建物群は整然とした配置状況にあり、当時の荘官等有力農民の屋敷跡ではないかと推察されている。昭和59年度には、同じくかんがい排水事業及び奥宮ほ場整備事業に伴い、当該地の東側で調査が実施された。この時には、10世紀後半～11世紀の掘立柱建物3棟^②、8世紀代の溝跡とそれと同方向に向く掘立柱建物4棟^③が検出されている。昭和60年度には、当該地の北部、県立近江八幡工業高校敷地内で調査が実施され、遺構は検出されなかったが、遺物包含層が確認されている。また、同年度に、県道下豊浦鷹飼線道路改良工事に伴う調査が、当該地の北部で行われ、中世の条里を示す溝跡と奈良時代の条里ではないかとされる溝跡の他土坑等が検出されている^④。昭和61年度には、60年度の県道改良工事の北側の拡張に伴う調査が行われている^⑤。

以上から、金剛寺遺跡は、条里施行前後にまたがる集落跡であり、あわせて、中世における、佐々木六角氏の二代頼綱が、この地に金田別館をもうけたことにはじまる金剛寺城^⑥の東部に位置することから、当時の集落の一大拠点であったことがうかがえる。

3. 調査経過

調査は、当初調査対象地5m×400mの範囲内において、全面掘削の予定であったが、工事に先がけて、水抜き用の井戸を掘る計画があり、これに伴って掘削の際立ち会いを行い、遺構の範囲を確認することにした。この結果、現在の県道豊浦鷹飼線より南へ200mの地点から300mの地点にかけて土坑状遺構の他柱穴を確認し、ただちに本格調査に移行する計画をたて、発掘調査を実施することとなった。

対象地域は、5m×100mの500㎡で、昭和59年度のは場整備事業に伴う発掘調査で設けた8トレンチの西側にあたる。調査は、重機による表土除去、遺構面検出を行い、続いて人力による遺構面の精査、掘り込みを行った。

4. 調査結果

イ. 遺構 (図版一・四・五・六)

検出した遺構は、掘立柱建物3棟、大型の土坑5基、小型の土坑1基、楕円形の土坑3

基、溝状遺構4条、樹溜状遺構1基である。遺構面は、マンガンを含む黄色粘性砂質土であるが、トレンチ中央は、削平されており砂礫層が露呈している。遺構検出面の標高は、92m～93mであるが、西側は、削平が著しく一部起伏があり、全体としては、北側と南側の一部を除いて遺構の遺存は良くない。

1) 掘立柱建物

(SB01)

東西1間以上、南北2間以上の建物で、東へ延びるものと思われる。柱間距離は、東西が5尺(151.50cm)、南北が6尺5寸(196.95cm)と6尺(181.80cm)を測る。柱穴は、径25～30cm・深さ20cm前後の円形である。一部の柱穴が、SK03に切られており、SK03より先行する建物と考えられる。時期は確定できないが、平安末から鎌倉時代初頭とみられる。

(SB02)

東西1間以上、南北2間の建物で、東西棟をとるとみられる、建物の方位は、SB01と同方向である。柱間距離は、東西が6尺5寸(196.95cm)、南北が9尺(272.70cm)を測る、柱穴は径25～30cm、深さ20～30cm前後の円形である。SK09、SK10の土壌に柱穴が切られており、これより先行する建物と考えられる。建物はトレンチの東に延びる。

(SB03)

SB02の南に位置する東西1間以上、南北1間の建物で、建物の方位は、SB01、02と同方向である。柱間距離は、東西が6尺5寸(196.95cm)、南北が5尺(151.50cm)を測る。柱穴は径20～25cm、深さ20～30cmの円形である。建物はトレンチの東に延びる。

2) 土坑状遺構

(SK01)

トレンチ北部に位置し、SB01の西側に隣接する。長径2m、短径1mの楕円形の土坑で、深さは、30cmを測る。遺物はなく、時期は不明である。

(SK02)

SB01の南に隣接する長径1.5m、短径0.75mの楕円形の土坑で、深さは、20cmである。遺物はなく時期は不明であるが、埋土が黒褐色粘性砂質土でSK01と同じため、SK01と同時期のものと思われる。

(SK03)

SK02を切る一辺2m四方の方形の土坑で、深さは、15cmを測る。又、SB01の柱

穴を切る。

(SK04)

SK03の南に位置し、一辺、2m50cm×1m75cmの隅丸長方形の土坑で、深さ24cmを測る。時期はSK03と同時期とみられる。

(SK05)

SK04の南東に隣接し、SD01を切る一辺約2m四方の方形の土坑で、深さは60.5cmを測る。坑内には、上層に黒褐色粘性砂質土、黒色粘性砂質土、黒茶色粘性砂質土、黒灰色粘質土の順に堆積が認められ、2層目と3層目の間に薄い木葉の堆積がある。遺物は主に、2層目と3層目に認められ、信楽焼の甕、鉢などが出土した。

(SK06)

SK05より西南に13m離れた所に位置する。一辺約2m四方の方形の土坑で、深さは70cmを測る。坑内には、上層より黒褐色粘性砂質土、黒灰色粘性砂質土、黒色粘質土、黒灰色粘質土の順に堆積が認められ、3層目と4層目の間に薄い木葉の腐葉土層がある。遺物は、信楽焼の甕、鉢のほか土師器片が若干出土した。時期はSK05と同時期と思われる。

(SK07)

トレンチ中央部に位置する2m×1.5m四方の方形の土坑であるが、深さ10cm程で、掘り形が舟底形になっており、他の土坑と異なることにより単なる落ち込みとも考えられる。

(SK08)

SK07の南に隣接し、SD03の中にある、南北2.75m、東西3m以上の長方形の掘り形をもち、土坑よりむしろ、SD03に伴う崩溜とみられる。

(SK09)

トレンチ南に位置し、短辺1.5m、長辺約3.0mの隅丸長方形の土坑で、深さは20cmを測る。埋土は、灰色粘性砂質土である。

(SK10)

SK09の南に隣接する約1m四方の方形の土坑で、深さは、50cmを測る。坑内は、上層より黄色粘質土と焼土の混合土、黄色粘質土、灰茶褐色粘性砂質土、黄茶色粘性砂質土、黒色粘性砂質土の順に堆積が認められ、3層目に多量の須恵器、土師器の遺物が出土した。又、釘が1点出土しており、墓塚の可能性がある。時期は奈良時代中期とみられる。

(SK11)

SK10の南に位置する短径0.75m、長径1.5mの楕円形の土坑で、深さは20cmを測る。

須恵器の短頸広口壺が1点出土している。時期は、奈良時代中期とみられる。

3) 溝状遺構

(SD01)

SK05と重複する位置にあり、N-65-Eの方位に流れる東西溝である。溝は堆積土層より2時期にわたり、南側に幅50cm、深さ45cmの1段くぼむ溝があり、その後、幅が1.9～2.0mに広がる2期目の溝がある。遺物は、主に、2期目の溝の北肩部に集中しており、常滑焼の鉢、甕、土師皿、羽釜片が出土している。

(SD02)

トレンチ中央部に位置し、SD03につながる溝で、溝幅1.0～1.5m、深さ20cmを測る。

(SD03)

SK08を伴う溝で、東側でL字状に曲がる、掘形は、なだらかな舟底型で、溝というべきかは不明である。

(SD04)

SB02の北に位置するN-65-Eの方位に流れる溝で、幅1.0～1.5m、深さ20cmを測る、SB02を画する溝と考えられる。

ロ. 遺物 (図版二・三・七・八)

1) SK01出土遺物

(1)は、須恵器の杯で、底部に断面逆台形状の高台がつく、高台は、腰部立ち上がり付近につく、(2)は、輸入青磁塊である、釉調は青味を帯びた緑色を呈す。体部外面に鑊のある蓮弁文を施す。(3)は、常滑焼の鉢とみられる外面全体に自然釉がかかる。口縁端部がやや肥厚し丸く収めてある。口径22cmを測る、胎土はやや砂粒の多い灰色である。

(1)は、奈良時代中期、(2)は、太宰府出土陶磁器の型式分類案によると、青磁Ⅰ-5、6類に属すると考えられる。(3)は、赤羽氏の編年^⑦でいうⅡ-後半もしくはⅢ-前半代に比定できる常滑焼とみられる。(2)と(3)は、SK01を切るpitの位置より出土しており、SK01の年代を決める資料とはいえない。

2) SK03出土遺物

(4)は、常滑焼の鉢で、断面逆三角形のやや低い高台部がつく、胎土は砂粒の多い灰色を呈す。

赤羽氏の編年でいうⅡ-前半代に比定できる^⑧。

3) SK05出土遺物

(5)、(6)、(7)、(8)ともに信楽焼で、(5)は壺、(6)、(7)は鉢、(8)は甕とみられる。(6)は復元口径25.0cm、(7)は32.5cm、(8)は32.5cmを測る、(5)は、やや褐色を帯びた砂粒の多い胎土で信楽焼特有の長石粒が認められる。(6)は、赤褐色のやや稠密な胎土である。(7)は、ややくすんだ褐色の稠密な胎土である。(8)は、赤紫褐色で砂粒を多く含む胎土で信楽焼特有の長石粒の吹き出しがみられる。

4) SDO1出土遺物

(9)、⑩は常滑焼で、(9)は甕、⑩は鉢である。復元口径は、(9)が36.5cm、⑩が24.5cmを測る。(9)の甕は、口縁部がN字状になる。⑩の鉢は、(3)と同様の形態である。胎土は、(9)がやや灰色の帯びた淡茶色の緻密な胎土で、⑩が灰色の砂粒を多く含む胎土である。(11)~⑬は土師皿で、底部より外上方に、開く口縁部を呈す。調整は、底部が指おさえのあとナデ、口縁部が内外面ともヨコナデでナデの範囲は底部近くまで施す。色調は、いずれも淡黄褐色である。(14)、⑮は、羽釜の脚部である。胎土は砂粒の多い土師質である。

常滑焼は、赤羽編年でいうⅤ-前半代に比定できる。概ね14世紀中頃とみられる^⑨。土師皿は横田編年のA₃-4タイプで概ね14世紀初頭とみられる^⑩。

5) 遺構面出土の遺物

⑯は、須恵器の杯身で、底部に断面逆台形状の高台を付す。高台の接地面は内側にあり粘付け部位は、口縁部立ち上がりに近い腰部にある。やや砂粒の多い胎土で灰色を呈す。⑰は、黒色土器の碗で、体部は外上方に直線的に延び、口縁部にてやや内弯し、外上方に開く。底部に断面逆三角形の高台を付す。⑱、⑲は、土師皿で、⑳は、㉑、㉒と同様の形態である。⑲は、口縁端部にてやや上方につまみ出している。㉓は、黒色土器の底部で断面逆台形状の高台を付す。㉔は、天目茶碗の底部である。

6) SK11出土遺物

㉕の広口短頸壺のみで、口径17cmを測る須恵器である。やや肩部の張る器形で、口縁部は若干内弯きみであるが、ほぼ直立きみに立ち上がる。灰色を呈し、内外面ともていねいなヨコナデ調整を施す。奈良時代中期頃に位置づけられるとみる。

7) SK10出土遺物

㉖は、須恵器の鉢で、口径16.6cm、器高9cmを測る。肩張りの胸部で、くの字状に口縁は内弯し、端部をやや上方へつまみ出し、内側に凹面を成す。灰色を呈し、内外面ともヨ

コナデ調整である。㉔～㉗は、須恵器杯蓋で、口径15.4～16.6cm、器高2.5～2.7cmを測る。天井部中央に径2.5～2.8cmの扁平なつまみを付している。形態は平らな天井部から口縁部へはやや稜をもって開き、口縁端部は内側へ屈曲させている。調整は天井部外面をヘラ削り、その他の部位は横ナデである。8世紀の初頭前後に位置づけられよう。^⑩㉘～㉚は、須恵器杯身で、㉘は口径10.6cm、器高3.5cmを測る。口縁部が外上方へ直線的に立ち上がり端部を丸く収める。底部外面がヘラ切り未調整で、その他の部位は横ナデである。㉙は、口径13.2cm、器高2.9cmを測る。口縁部は外上方へ大きく開き、端部付近で若干外反する。端部は丸く収める。底部外面ヘラ切り未調整、その他の部位は横ナデである。㉚は、口径14.0cm、器高3.8cmを測る。口縁部は若干外反ぎみに外上方へ立ち上がる。端部は丸く収める。高台を底部と体部の境よりやや内側へ付ける。高台は内縁で接地している。底部ヘラ切り、他は横ナデである。㉛、㉜は8世紀初頭前後、㉝は、7世紀後半代に属するかと思うが微妙である。㉞、㉟は土師器で、㉞は、いわゆる近江型の受け口状口縁を呈する長胴甕で、㉟は鍋である。㉞の甕は口径25.8cmを測る。胴部はあまり張らず頸部付近で若干張る程度のものである。口縁部は、体部よりくの字状に屈曲したあと、やや内湾ぎみに立ち上がり、端部付近にてほぼ直立する。端部は丸く収める。内外面とも斜方向のハケ目調整を施し、口縁部のみ横ナデである。㉟は口径41cmを測る。器形はサラダボール状になるものと思われる。体部は若干内湾ぎみに外上方に立ち上がり、口縁部に若干肥厚し、くの字に屈曲する。口縁端部はやや下垂ぎみになる。口縁部は横ナデ、他は斜方向もしくは横方向のハケ目調整である。砂分の多い淡黄茶色を呈している。平城宮SD1900溝出土の甕・鍋の例と近似しており8世紀初頭に位置づけられる。^⑪

5. 小 結

今回の調査で検出した遺構は、旧条里と並行する掘立柱建物3棟、溝2条と、掘形が楕円形を呈する土坑3基と方形の大型土坑4基焼土が混入する土壌1基である。このうちSK01、02、10、11は出土土器等からみて奈良時代中期の遺構、SB01、02、03の掘立柱建物とSD01、04の溝状遺構が鎌倉時代初頭1200年代、SK03、04、05、06が室町時代1400年代で、概ね3時期に分けられると考える。又、SK03～06にかけての遺構は、当該地より東に100m程の所で、昭和59年度の調査で設けた8トレンチにおいても検出されており、同様の遺構の広がりか推定される。

今回の調査地は、小字十四ノ坪、十五ノ坪の境界となる農道ということで、条里遺構の検出ということが課題であったが、実際は、鎌倉時代の掘立柱建物が検出されるなど、現在残る小字名が、そのまま旧条里に結びつくとは断言できない資料が提示された結果となった。ただし、昭和60年度に行った県道拡幅の際実施した調査で検出されたN-64~65-Eの方向に規制される建物と溝が検出されたことは、すでに鎌倉時代において、当該地が条里方向に制約されていることを物語る。又、SD01が、60年度の調査で検出した溝より約220m南に位置しており、現在残っており十五ノ坪と九ノ坪の坪界にあたる溝とも考えられる。現在、周辺には、一ノ坪から十ノ坪、十二ノ坪から十五ノ坪、二十坪と称される小字名が残っており、中仙道側の東から西に順に呼称され北へ上がっており、七ノ坪から十二ノ坪を除いては、概ね南北109~110m、東西55~60mの短冊型の地割りを一坪としている。この時期が、いつまでさかのぼれるかは限定できないが、今回の資料では、少なくとも鎌倉時代より室町時代において居住区になっていたことがわかる。

次に、土坑群についてであるが、SK10を除いて、ほぼ規格性があり、時代別に土坑の形状が異なる点である。昭和59年度調査の8トレンチで検出した土坑について、井戸もしくは、貯水用の土坑かとした中で、なかには土壘墓であった可能性をもつものもあるとしている。今回の調査で、SK03、04は極めて浅く、井戸とするには不相当であること、又、SK05、06については、埋土中において掘形全面に一時期木葉が堆積する期間がある等からみて、貯水用の土坑とも考えられる。今後の類例を期待したいところである。さらに、SK01を始めとする奈良時代中期の土坑については、墓の可能性が考えられる。骨片、その他の資料が出土していないため断定できないが、SK10の焼土が混入しておる土壘は、墓の可能性をもつものと思われる。

6. おわりに

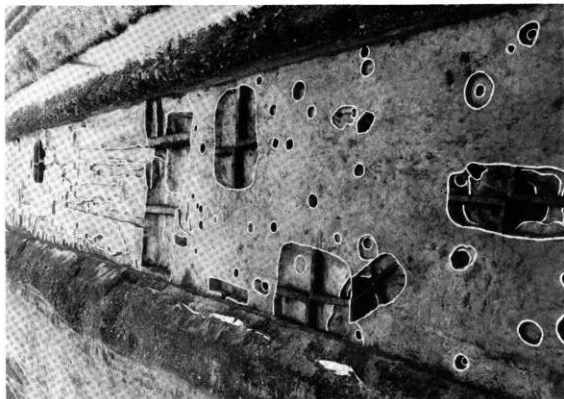
今回の調査は、金剛寺遺跡の中では、極一部である。又、本章では述べなかったが、これより南は、トレンチ南端より50mの地点で幅6~8m、深さ2mの大溝があるのみで、遺構は存在せず、当該地が金剛寺遺跡の南端にあたるものと考えられる。

さらに、調査の結果、必ずしも現在称されておる小字名が、旧条里の小字名にあたるかは疑問が残ることを付しておく。

註

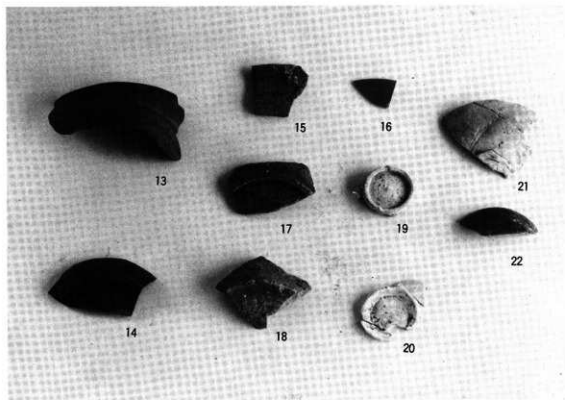
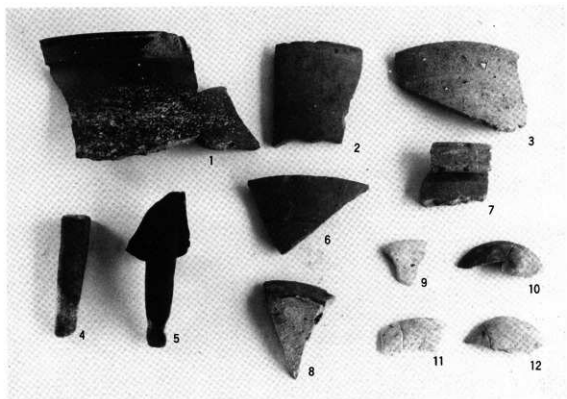
- ① 近藤 滋 『滋賀文化財だより No.86』(財)滋賀県文化財保護協会 1984)
- ② 田路正幸 『泉宮かんがい排水事業関連発掘調査報告書Ⅱ-1』
(滋賀県教育委員会・財)滋賀県文化財保護協会 1985)
- ③ 田路正幸 『は場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ-3』
(滋賀県教育委員会・財)滋賀県文化財保護協会 1985)
- ④ 田中勝弘 他 『県道下豊浦鷹飼線道路改良工事に伴う金剛寺遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
(滋賀県教育委員会・財)滋賀県文化財保護協会 1985)
- ⑤ 清水 尚 他 『県道下豊浦鷹飼線道路改良工事に伴う金剛寺遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
(滋賀県教育委員会・財)滋賀県文化財保護協会 1987)
- ⑥ 近江八幡市教育委員会『金剛寺城遺跡発掘調査報告書』(『近江八幡市埋蔵文化財調査報告書』(Ⅱ) 1983)
- ⑦ 赤羽一郎 『常滑焼-中世窯の様相-』(『考古学ライブラリー-23』(ニュー・サイエンス社 1984)
- ⑧ ⑦と同じ
- ⑨ ⑦と同じ
- ⑩ 横田洋三他 『平安京左京四条三坊十三町 -長刀鉾町遺跡-』(平安京跡研究調査報告第11輯) (財)古代学協会 1984)
- ⑪ 奈良国立文化財研究所 『平城宮発掘調査報告書』Ⅷ (1976)他。以下須恵器の項同じ。
- ⑫ 小笠原好彦 『滋賀文化財だより No.82』 (財)滋賀県文化財保護協会 1984)

トレンチ北側(北より)

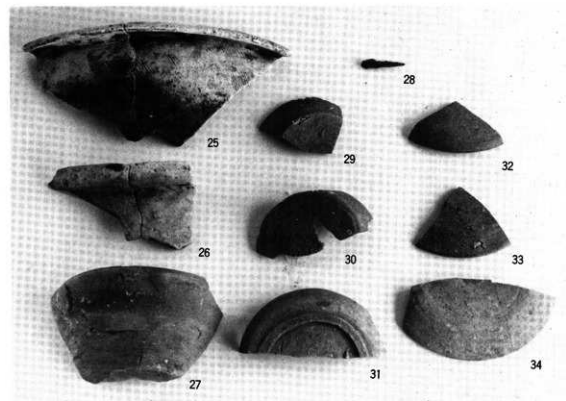


トレンチ南側(南より)

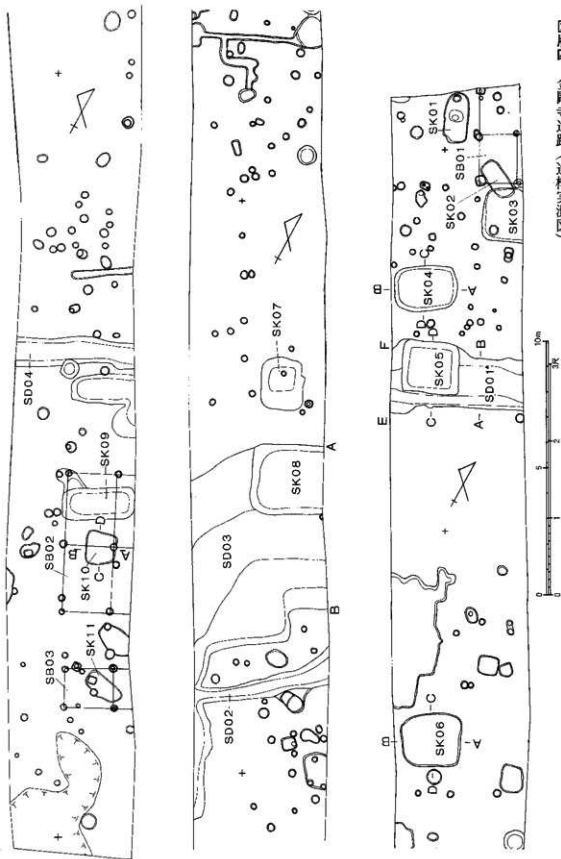


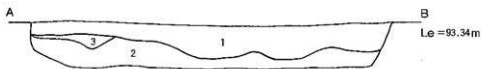


1. 2. 6. 8. (SK05) 3. 4. 5. 7. 9~12 (SD01) 13 (SK11)
 15. 16. 17 (SK01) 18 (SK03) 14. 19~22 (イコウ面)

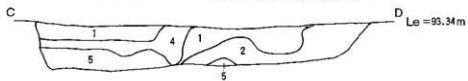


23~34 (SK10出土)





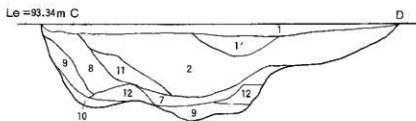
- 1 黒褐色粘性砂質土 3 黒灰色砂質土 5 黒色粘質土
2 黒灰色粘質土 4 黒灰色粘質土と茶褐色粘性砂質土



SK04土層図

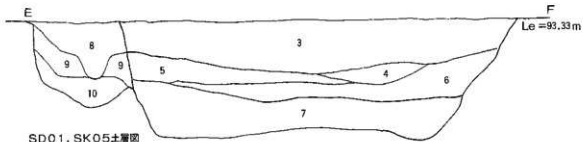


- 1 茶色土 } 攪乱耕作土
1' 灰茶色土 }
2 黒茶色粘性砂質土
3 黒褐色粘性砂質土
4 黒色土と黄色土の混合土 } SK05
5 黒色粘性砂質土 }
6 黒色 (マンガン含む) }
7 黒色粘質土



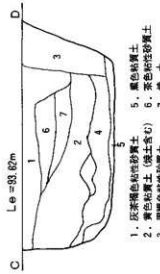
SD01土層図

- 8 黒灰色粘性砂質土
9 黒色土と黄茶色土の混合土
10 黒灰色粘質土
11 褐色粘質土
12 黒色土と茶色土の混合土
(9と同じか)

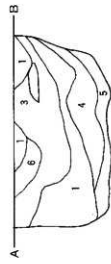


SD01. SK05土層図

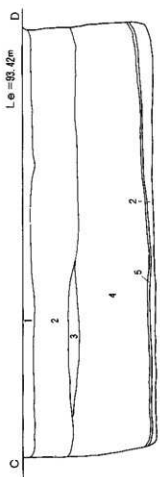




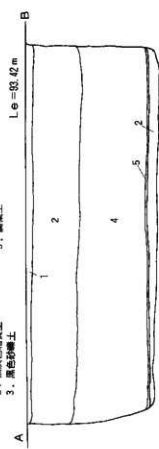
- 1. 灰茶褐色粘性砂質土
- 2. 褐色粘質土 (粘土含む)
- 3. 黒褐色粘粒砂質土
- 4. 黄褐色粘質土
- 5. 黒色粘質土
- 6. 茶色粘性砂質土
- 7. 黄土



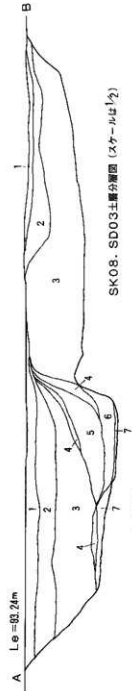
SK10土層分層図



- 1. 黒褐色粘性砂質土
- 2. 黒灰色粘質土
- 3. 黒色砂礫土
- 4. 黒色粘質土
- 5. 礫質土



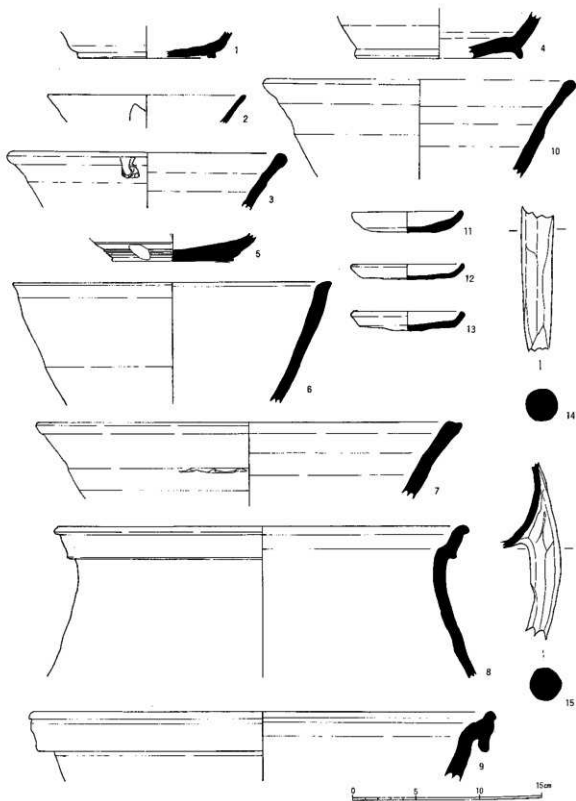
SK06土層分層図



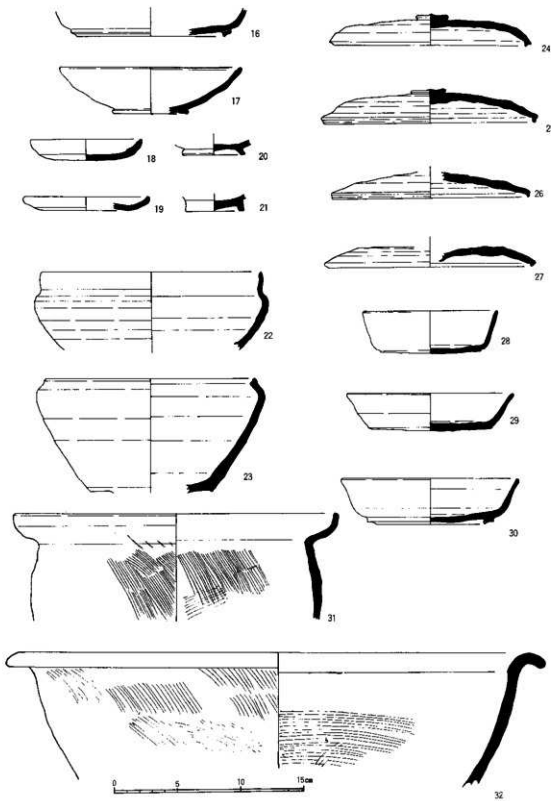
- 1. 砂層
- 2. 黄褐色粘性砂質土
- 3. 褐色粘性砂質土
- 4. 黄褐色粘性砂質土
- 5. 砂礫土
- 6. 黒灰色粘質土
- 7. 黒灰色粘質土
- 炮山は礫層

SK08. SD03土層分層図 (スケールは1/2)





1. 2. 3 (SK01) 4 (SK03) 5~8 (SK05) 9~15 (SD01)



16~21 (イコウ面) 22 (SK11) 23~32 (SK10)

昭和62年3月

県営かんがい排水事業

関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ-2

編集・発行 滋賀県教育委員会文化財保護課
大津市京町四丁目1番1号
☎(0775) 24-1121
財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
☎(0775) 48-9780・9781

印刷所 富士山版印刷株式会社
大津市札の辻4-20